

# 毎日新聞 年年歳歳

○あこがれの葛根湯医者

平成 26 年 5 月 18 日

じごくばつけいもうじやのたわむれ

落語の世界の話です。夏の医者、ちしゃ医者、地獄八景亡者戯、風邪の神送り、一文笛、義眼など、落語の世界にお医者さんがよく登場します。中には臓器移植を行ったり、直腸鏡を操る先生もおられますが、たいていはやぶ医者であったり、強欲であったり、インチキであったりして、あまりパツとしません。

風邪がはやりますと、お医者さんが足りません。風邪ぐらいなら誰でもいいだろうと、へたな医者もはやります。やぶは風が吹くと動きます。風邪の時にはやる（動く）から、やぶ医者です。

かつこんとう

やぶ医者の代表に葛根湯医者があります。どんな患者がきても風邪の漢方薬の葛根湯ばか

なか

り処方します。風邪で来た人にはもちろん、お腹の痛い人にも処方します。挙げ句の果てには付き添いできた人にも葛根湯を渡そうとする始末です。他の薬を知らなくて、なんでもかんでも葛根湯を出すので、葛根湯医者とよばれて、やぶ医者なのです。

今の時代でも、葛根湯は風邪の漢方薬の代表です。病院や診療所でも使われますが、町の薬局でも売られていて、皆様方にもお馴染みかもしれません。

ところが、全ての風邪に葛根湯が効くものではありません。葛根湯の効くタイプの風邪を

しょう

見分けて、そのような人に葛根湯を処方するのが大切です。これを漢方医は「証」を見極めると言います。私は風邪に対する漢方薬は10種類あまり使っています。

葛根湯は風邪以外にもたくさんの効果があります。頭痛、歯痛、肩こり、蕁麻疹、お母さんのおっぱいの出をよくするときにも使います。お腹痛にも人によっては効きます。

見方を変えると、葛根湯医者は、葛根湯の効くタイプの人を鋭く見分けて、葛根湯を処方していました。風邪の人も、お腹痛の人も、きちんと診断していました。付き添いの人

ち

はこれから病気になりそうと診断したのでしょうか。「未病を治す」といって、病気になる前に治療する、名医の仕事です。

漢方薬は同じ病気でもそれぞれの人に合わせて多くの種類の薬を用います。そして、一つの薬でいろいろな病気に効かせることができます。これが漢方医の腕の見せ所であり、さじ加減です。

私は葛根湯医者は決して落語で語られているような、やぶ医者ではないと思っています。

むしろ、葛根湯を自在に操り、他の漢方にも精通している名医であります。私も腕を上げて、葛根湯医者と呼ばれたいものです。